河内名所圖會

前篇 上

ル 4
2472
1

ル 84
2472
1-6

昌平

河内國名不圖之序

大凡名號古讀兒於史我善
お國風者七多而幾内為最
若夫山堆大和息周毋論
已往之採津河内和泉此之
若善者也揃京二國名不圖

小澤文庫

花山院大納言兼右大将愛徳卿

河内名所之賦

通齋亞相君玉藻か集の序らし紅娟美哉あらむ那
ふりに冠らる平安をたゝえにほひて津の國に満るその月の光りぬる
にほふしもやらん哉桃かけらの國を
神日本磐余彦の古へ尊みて孔舍衞坂にて流矢にあたり給ひ
東意れ白肩の津に上りて長髓彦を討んとしてつひに此國に
入給ふ古見ハこの國の名ありかはしためかりける河のみち 世八九河と
よびて和泉をもつせかや 元正の御記ありて九の字を去りめ
三郡をわけみの國として外にも山をはしめかけて 山北

秋の色に志みぬ松も那く大江の岸に寄りて雲井にみなせる
往駒の満金剛山をも嵩らしき國ハ此國にきこゆる 横山の
炭竈を切（コギリ）の本ことき鶯尾ハ春の日かけ守らで桜花咲く
をかしき枝も雲と見え高きもち梨字満人の目をさまさしむ 川ハ
石川乃蛍亀瀬川の巌や岩も川に仰ぐはそれの流涼しき
その川も七夕ほめに眉うるると業平のつもよみ出せり八星因の
わかれに寄る名所へし 片足羽川ハ萬葉集に見えて高瀬川ハ
名のこ高し 嶺を河上多名み称二上子け峠ハ様子根
十三峠河内ハ鶯の関よりて末此あしこに河内哉きて尓劔

そ免ほうん峠ハ手向の訛なるへし大かたの國ハ古かひ手
あるれハ神に禊し手向しを通るなるの名なるなし野ハ丹比聖に
反正の事の皇后の蹟交那ハ此にしへの御かり陽里ハ土師の里高安ハ
ちかしハかりちかひの志のひ洛池ハ狭山の池なんなと廣うしてあけたる
月のかけをひしく絶間(タイマ)の池ハ袗子(コロモコ)ヶ無かしが思ふ橋を手早の橋
久米の山ハ橋ハ明る偏したとかけるき乃神のたちらひ給ひしもをかし
城語ハ手早赤坂小根(ヲネタ)冈金胎なの城龍泉寺の城なとみな楠ゟ
羅城(ヱダシロ)といふ社を平岡譽田壺井道明寺の社佐古のなしろ
其外延喜式内の名しろもなし寺ハ天野ハ寺ハ古を

後村上のみかとをかりてしきぬ天野度と称ハ観心寺ハ楠の菩提所
をかや弘川寺ハ西りし塚高喜ちかハ弘法大師の遺蹟あり
上の古子ハ一房三骨ハ海墓山下の古子にハ神姫掠あるを
通法ちハ源家の墳ハかたし玉手の子ハ林原ハ石川を葦きぬ
風色うるはし葛井ちハ西國めぐりの札所なり事蔵を
此國に特にあやとの梨古蹟ハ飛鳥の飯室清の院今(ヱニカ)尓賀ハ
市壺井ハ源家相傳の名かたなり墓ハ王仁の墓真雅の墓
楠正成正行の墓あり此國ハ畿内州(ウチツクニ)の元とかして山背ハ
かしらうし大和楠ほを腋とし此川美紀伊ハ尾をなし

山川乃宇留たし番かたしきり北木の葉北あほ世とそれと
美和ハ北をこほかあたこほ乃ほ北にも乃ほ乃ほ乃ほ乃ほ
南をむて後の河をくりをかへるとしたしやれたれん南原世京めこり
やまをもえこりなりまゝ河内めこりなれハ豈憾おほかるをらんや

享和たしめの葉 西の社

秋里 竹離嵩

河内名所圖會巻之壹

錦部郡

國號之訳
天野山
後村上帝行宮
南朝皇譜
金剛寺
金堂
求聞持堂
開山塔
丹生社
食堂
五佛堂
持明院法皇塔
鐘楼
多宝塔
閼伽井
鎮守三社
観音堂
薬師堂
観月亭
五本梅
惣門
護摩堂
楼門
天野山什寶
天堂名巻
天野川
三日市驛
紀見嶺
加賀田八幡
巖湧寺
潮瀧
観音寺
扇山
藏王嶺
光瀧寺
光瀧名巻
白炭
鳥帽子形古城
上田八幡
上原八幡
高向王墓
錦織神祠
人麿古蹟
天神祠
二十山
横山天神
西條川
金胎寺古城
河合寺
河合碑
南郭先生撰
烏石山人筆
行者堂
礼拝石
弁財天祠
獨鈷亜井
観心寺
本堂
賀利帝母社
二層塔
七星塔源所
閼伽井
糸梅名本
鐘楼

實惠上人廟
觀心寺官符
正儀書
中院什宝
八幡宮
高向麿

楠正成首塚
寺記
正時書
楠氏名劍
旭原
僧善議

畠山尾張守墓
正成書
槇本院什宝
同兵器
三岳神祠

後村上院陵
正行書
高向玄理

河一ノ壹

壽

南朝故蹟此攀躋練
若巍然路不迷將就
老僧訪遺事蒼杉深
處杜鵑啼

愚山題

壽

壽

壽

壽

後村上帝
皇居
天野殿
観月亭

南方紀傳云
南帝より
伊勢大神宮に
奉幣使を立る
御門三種の
神器を御あ
ありて御製

四の海は
波もおさまる
たりしあく
三ツの寶成
身にぞ傳ゆる
後村上帝
御製

九重の
今も
海をみ
流の
かはせをてらは
光へなり
門御製

河内の國府へ都を和泉あり一は大河内國の西北境を經て攝津國の東南境を過ぎ大和の國に通ず古九道の一（凡そ撮括神武天皇東征し給ふ時浪速より大和の國に通ずる道路の數へ）

白肩の津に至り給ふまで國号の顯れしものなし

丹比に遷都の事都を二ヶ年ばかりにて難波に還し給ふ事

五穀成熟人民富饒天下泰平之れ帝國の皇城のあらし縁之（以上日本紀）元明帝の和字を詔し給ひしより諸國の國郡の名を二文字定め凡の字を省き給ふ（續日本紀）元正帝壺龜四年四月甲子白大倭日根和泉の三郡を割き始て和泉國とす（類聚國史）延喜式云本國管郡十四名あり錦部（或は作錦織）石川（東條郡）高安（俗呼恩智郡）河内（攝津茨田交野若江）澁川（志紀）丹比（後分類聚云為大縣郡丹南丹北後又割二此郡一出二八上郡一）古市（安宿）大縣（養老四年十一月停二堅上堅下二郡一更二名之疆域東は和泉西は播磨南は紀州の界ふ至て北山川の界ふ至る都て東西五里許南北十四里許山嶽東ふ絆絡し大河（淀川）西ふ縈帶し北は東南高く西ふ低し多水南より西ふ流る故ふ土人南と上と呼び北と下と呼ぶ風俗素樸淳厚ありと者驗と好ぶ稼穡を力め尚古の風なお存ぬ

婦人は棉布を以て裙とし之を訶陵と云ふ男子は木綿と称し租稅ふ輸す延喜式ふ見ゆれ共ふ其詳ふ考ふ可ふ非ず神武帝國初の御時ふ已ふ郡と定ふ給ふ事ふ

二郡と珍努宮ふ供し神護ふ由義宮ふ遷し給ふ事ふ文武成南郊ふ星精降ふ事ふ

畠山高屋城ふ居し飯盛山ふ城ふ三好長慶と戰ふ事ふ

諸城ふ屢し攝州の布政司ふ居ふ和事ふ筆ふ盡し難し

錦部郡 東は石川郡を限て西は泉州大鳥和泉の二郡を限て南は紀州伊都郡を限て北は丹南郡を限る接まふ綿紵八綾綺の訛あん

天野山 當國の西南ふあり泉州の奥ふて十八町之翠嶺高低同ふからず溪流の水も味まし

淺村上帝行宮 又天野山金剛寺ふあり其ふ文武の時の行宮ふく後伝ふ云ふ如の中ふ

新葉集 君そのは苔ふも尾ふも宮居しふく

南方紀傳云

○**後醍醐天皇** 十一月二日誕生嘉元二年十一月九日御元服同日叙三位

徳治三年九月十九日太子に立文保二年二月廿六日踐祚御年二十二

同二月十九日御即位延元三年八月十六日崩ふ吉野如意輪寺ふ葬ふ

藤原為兼

尊良親王 一品中務卿 母贈従二位為子 若宮 一品號奥州宮 又号宇津宮

宗良親王 征夷將軍中務卿 母同上号妙法院門跡尊澄還俗 興良親王 遠州宮 天野周防守為擒

護良親王 征夷大將軍兵部卿初梨本門跡還俗 号大塔宮尊雲母民部卿之位局師親女 隆良親王 征夷將軍母准后親房女 於若野被誅

世良親王 大宰帥 上野太守 早世 母宰相實俊女 女

恒良親王 東宮前坊 母ハ阿野中將公廉女新侍賢門院

成良親王 上野太守 征夷將軍

南朝二代

後村上院 御諱義良母ハ新侍賢門院阿野中將公廉女 初ノ一品陸奥大守兵部卿

忠尊法親王 聖護院 母宰相實俊女 初号二輝尊一

懐良親王 征西征軍式部卿 明史記良懐

大覚寺宮 小国配流為名越 被誅

無文和尚 遠州興山法興寺開山也 入唐の人

一品公主 此間六人中畧

南朝四代

後亀山院 御諱熈成法名金剛心又號小倉殿母ハ嘉吉門院勝子 迫清左大臣經宗之女 此間四人中畧

南朝三代

長慶院 御諱寛成於山門自害 法名覚理 此末三人畧

南方紀傳云

南帝 後村上帝即位の後一品入道親房の常陸國より神皇正統記五巻を献せらる先帝の女御栄子御飾をおろさせ給ふ戒師は青蓮院慈道法親王之其御女御一首の歌を尊雲法親王に遣し給ふ

たひ衣をしぶりた濃の一しほと色に出てるをみそめ神 女御栄子

色かゝる神のおとされかれたるしとしきも出てるゝ神無月かな 芳園親王

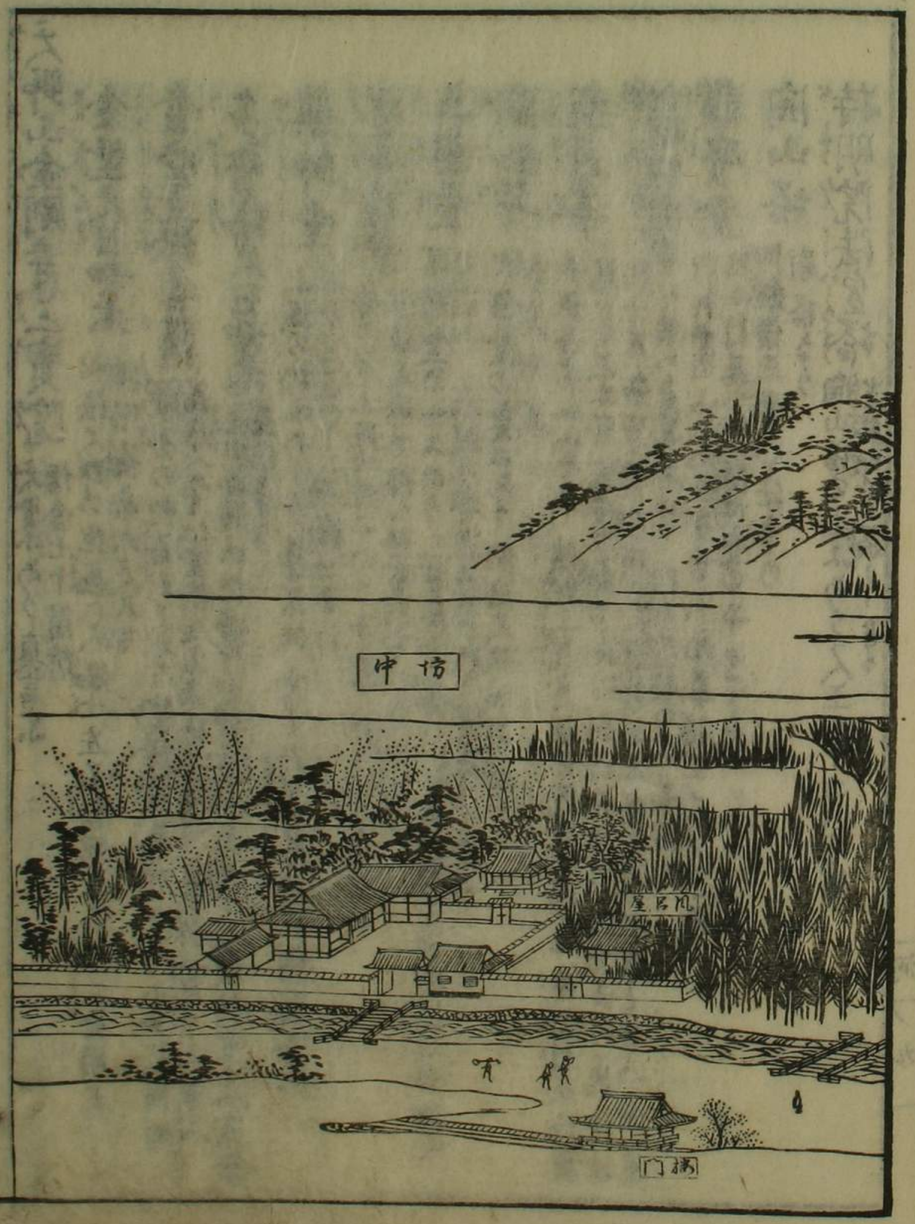
太平記云

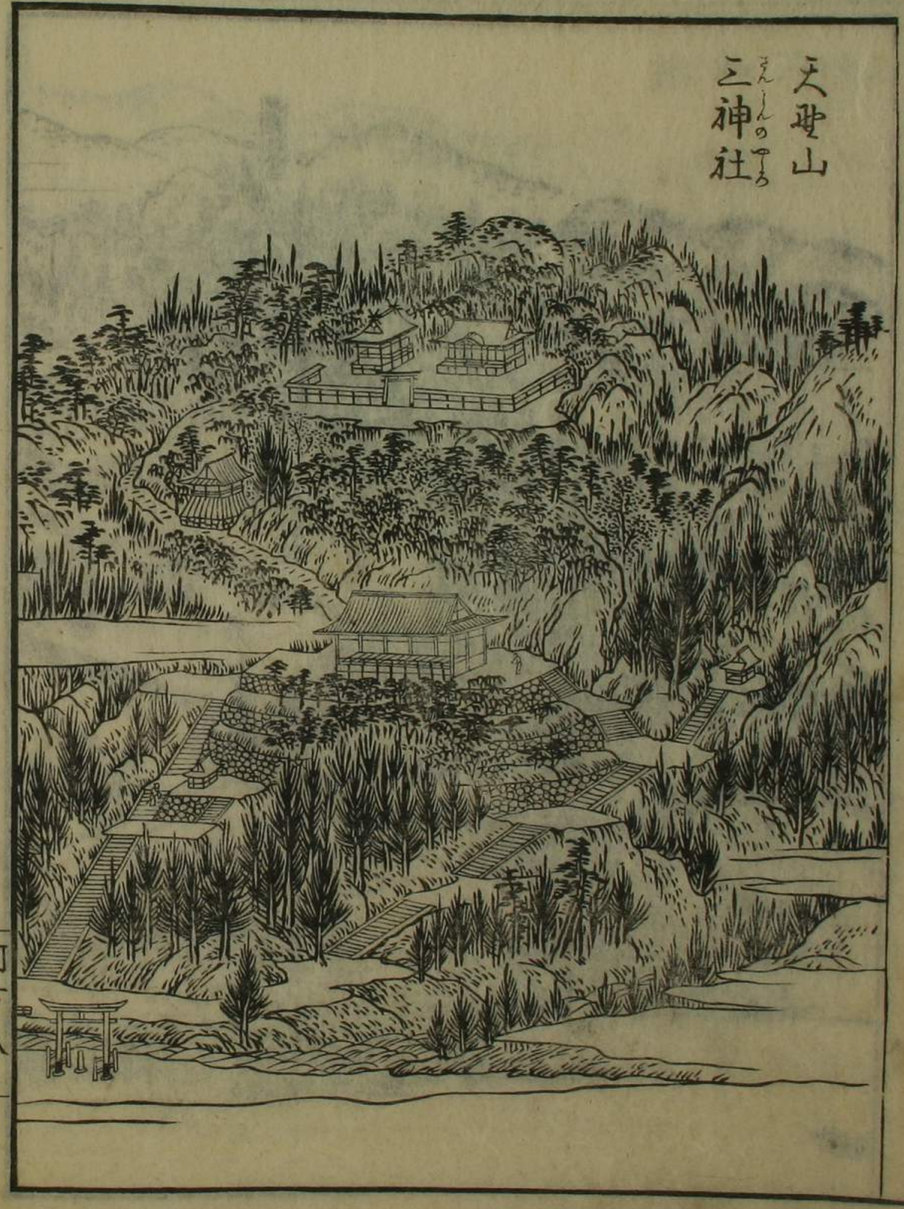
此頃吉野の新帝は河内の天野といふ所を皇居とせさ勢ゆへ楠左馬頭正儀和田和泉正武武人天野殿に参しく奏聞しけるは畠山入道道誓東八箇國の勢を率しく二十萬騎已に京都へ着くひけるに山陽道は播磨を限りに陸道は丹波を境東海東山南海小陸道の兵粮を尽して上洛仕りけるれは故の勢は定て云度の如くにそひけん但合戦に於ては決定御方の勝とこそ料簡仕ってはへ其故は軍に三の謀ひ有し所謂天の時地の利人の和にてはへ此中一も遠ふ時は勢ありと

天野山金剛寺
表門
酒造る
寺なのりしや
宮のくれ
西吟

求聞持堂

天那伽藍
南山堂
月見亭
御新堂
茶所
金堂
食堂
楊門
三社
三社明神


仿中
風呂屋
橋門


天豊山
三神社
河ノ八

大野山金剛寺三寶院　伊舎七十箇所
金堂大日如来　弘法大師の作長八尺脇士左不動明王右浄三世明王
同作長各八尺みす　宝頭盧尊者堂内小安に同作
食堂文殊菩薩　運慶の作長八尺みす　宝頭盧尊者堂内小安に同作
多宝塔大日如来　後村上帝の御宇仏師の作長八尺
薬師堂　上座の地あり本尊薬師仏を行基菩薩の作長八尺
日光月光十二神将を安ず
求聞持堂　あの方上座の地あり本尊虚空蔵菩薩
弘法大師の作之仏像内安ず　結界所
五佛堂　薬師堂のいわあり三寶院より帰に五智如来を安ず毎日の作
堂内小　東照大神君のをる所を安置し奉仕
開伽井　五佛堂の奥あり弘法大師加持水
観月亭　五仏堂のかたあり　後村上院月見の御殿之今ハ廃破の御殿
造りえ之五仏堂より廊下あり弘法大師の像を安ず真如法
親王の御
金輪仏頂尊の像ハ負享年中　桂昌院殿の御寄附之
脇士不動尊愛染明王ハ運慶の作俗ハ御影堂という　西室
護摩堂　御新堂の小ありあり本尊を安ず不動尊脇士大日茶毘
共ハ行基の作灌頂堂の
阿観僧正覚心法下の
向山塔　廟塔なり
持明院法皇塔　向山塔の上あり人王九十六代の帝
光厳院と謚し奉る

鎮守之社　若女龍王の二座を安ず運慶の作長八尺みす
五本櫻　金堂のお
楼門　額金剛寺　東向毘沙門　持国の二天を安ず
冊生明神社　楼門の東山腹あり　多聞　後向法皇
あり此地のおよそ南ハ道あり是より
和泉の国境まで十八町
鐘楼　時頼入道の寄附之　あの左ハあり建長己卯年十月廿七日最明寺
観音堂　本日仏作の作九十一面観世音を安ず当山集会所
潅頂院みあり　満願院
惣門　東向金剛力士の二王を安ず弘法大師の作
主當山葛城の峯岡古佛導輪の聖跡阿弥陀王鐵塔奉収の霊域ハ
て僧正行基の草創より廃后弘法大師密法流行之霊瑜珈の浄地ハ
星霜累りく四百余年を経る之聖跡大ハ荒廃に　後向法皇御宇永万元年
紀の南山の沙門阿観ある者高野明神霊告あり此内国之大野澤に
住く廃跡を興そべしと奉阿観之瑞と一ハ錫を飛し此山ハ至りを簡

の救澤とうるは異人岩上小觀音に阿觀こと二位の人ぞや答へく我は建礼
門神天部澤五棲ん阿觀歡んで垂跡こと今の示現と符合をれば翁ら意に
随ひまくり方かし因茲奥隆の志頼孝くく風燈ら奏し後白河法皇敕心
深くに給ひ安元年の春高屋貴布禰宮に憲眞奉詣くく再営あり昇金堂食堂
御影堂の諸伽藍悉成就にみば仏舎利を賜ふて小安くみ嶺峰寺共ニ
皇子真如法親王の深させ給ふ弘法大師の圖画と御影堂ら安く毋生ろろの
神祠を建く鎮護とし後白河の院の勝とや右ら将頼朝卿の御教書建久二年
八條女院領下くく傍ニ綱七十余坊と造くら同二年石川判官代源義兼
寺領ら國役諸役雑事長免除をべき院宣を給ふて後白河法皇再建の由致を
とりく寺二位尼守貴法親王の高野く称歸中ニ和ニ学頭阿闍梨
女院の芳信を感じ春風と繕ぐ女人の高野く称歸中ニ和ニ学頭阿闍梨
恩室町ら瑞光とうるを阿育ニ王の鐵塔と感得し古仏聖跡なる事ふもられる
昂其出現の所と今塔尾ら元弘ニ年二品兵部親王文雄宮の令旨を賜ふて播州

西の庄を行福の用黄ふるうる建武二年十二月後醍醐帝風詔とりて東寺僧宋
の伊舎利ふ粒と西ら収めく延元元年十月ら勅願寺と成南朝ら五十年北朝の三宝
尚ふり堂同年八月持明院上皇高頭禅衣法布と戒師とし同九年南帝の皇居を
當山ら移し伽藍ふ白堂と常御殿とふ
を守護しまそこ所殿と称し同十年南帝の微君僧徒ふ勤して若楽と傳受ふさしめ
有銘の梵鐘と書附し法会ふ潤色し
嵯峨帝の御灌頂の右頼あり
弘法大師自画しの胎金両部の曼荼羅とこら遷しまそ
こうの禅恵法守とりつく灌頂の師とし薬其曼陀羅と勅しく弟ら納む後村上帝
殿閣ふ達し弟ら者庄務加山田ふ結ふ結縁灌頂の料と四海ふ本の御修法毎年三月ふ
こんとりら同十五年中興阿観と賜僧正ふ任し代ら聖主将軍家國司の崇敬ふ
祈ふふの形勝とうるふくふくしくふくふく後ふ船華の盛ふく鉾磬白雲和松の声暮閑とめ
ぐりまく梅匂ひて堂の初名谷ふ徘し杖ふ出ふの水ふ月澄く林葉小風ふれひく實ふ繁ふ
の霊微寺ふ比しく杜詩ふ山水の絶勝と書れしく地ふ生境とうるぞし

両部大曼荼羅 二幅弘法大師筆初祖中興有之 同梓子曼荼羅 中興阿観傳正筆
釋迦三尊種子 中將法印比丘尼自身の髪髮をもつて縫ふ 持明院法皇御筆附
佛舍利 五粒 後白河法皇当山再興の時 東寺傳来御舍利 後村上帝御書附
三鈷杵 金剛王菩薩 弘法大師 日本三筆の筒の壷實上人当山塔の尾より感得 編有之
最勝王經 紺紙金泥 聖武帝宸筆 法華經開結 紺紙金泥 光明皇后御筆
大毘婆娑論 光明皇后御筆 讃浄土經 中將法尼 法華經 同筆 紺紙金泥
寶篋印陀羅尼經 明惠上人 念珠二連 阿観僧正 持物
能作生玉 一顆弘法大師 持物 鈴五鈷 明鏡 二枚同大師 持物
泥塔一基 同大師造立 不動陀 宅磨法眼沈賀筆
阿弥陀佛 宅磨 釋尊 張思恭筆 法華総法像 巨勢金岡筆
同講中尊 同筆 陀羅尼品像 北畠治部卿入道 愛染明王 興教大師筆
威徳明王 覺鑁僧正筆 六觀音 阿観傳正筆

弘法大師御廟出現像 觀賢僧正写 出現の時 廟窟の内より御自作の御影出現す 大師御入定の時を異ならず
後白河院御宸翰 後白河院 御年十五通 大官家文書 二通
後鳥羽院建久御綸旨 二十九通
右大將頼朝卿已来代々將軍家文書 四十九通 大閤秀吉公御書 弐通
楠左衛門尉正成自筆 二通 同正行正時正儀等書翰 十一通
寶劔 長弐尺弐寸 銘 同 長九寸 日州
高麗笛 聖徳太子御所持 琵琶 銘雷神 同 長九寸 出雲守秀元法皇御所持
笙 銘鳳凰 同 壷笙銘鈴丸 已上二品 銘 同 信貴山頼尊作
太鼓 鞨鼓 鉦鼓 已上二品 後村上院御所附 緋威鎧 楠正成持物
古皮具足 旗指物 山水屏風 狩野古法眼之信筆 同 土佐光信女筆
紙太鼓 小鼓 六挺
菊水旗 自是已下楠中興尼院什宝 菊水の紋あり又非理法権天の五文字正成の名像ともに真筆
秘傳兵書 二十一帖

菊水太刀　鎧通刀　銀銷守刀　月山佗此三品正成所持

正成木像　長壹尺五寸　長男正行彫刻

愛染明王　坊舍中院什宝　弘法大師筆　不動尊　紗澤和上筆　屏風　一双ハ土佐光信筆　一双ハ雲谷等悦筆

聖徳太子御彩　坊中無量寿院什宝　守登退治等像御自佗其外坊中ニ什宝多し

天野名産　天聖酒むかしハ坊舍ニ造り高貴へ献を佳美之松茸　嵩山より多く出る天聖楊形雞卵の如し　温湯をもつて浴味成

書生ハ其味蜜の如し

天聖川　天聖山寺の入口なり　水源天聖山より流く

末ハ狭山の池ニ入

三日市驛　京師雑波なりの高聖街道之旅舍多くありて日の斜なれハ

ゑり出女の目さむるばかりに化粧しく河内鳥の着ものに

思ふ深の拖襴美しく遊ひ人の袖引袂をとゞめて一夜の侍女と

する事むかしよりの風俗とかや

さくのやれ一夜のまくらはしと書残さるもあはしとの葉　馬丸賀参

弥山旅客

何のほかありたん高聖詣のおりふし此所ニ一宿

してまゐあるし所をみよりて短冊残りけるとぞ

紀見嶺　天見村の南なり　紀州伊都郡の界之

天見より一里十七町あり

畠山義就寛正四年の箕

嶽山を退くさくを過る口吟云

夏落る紀の見峠れり末も人ハ満かせく咲花成見ん　義就

加賀田八幡宮　加賀西村ニあり宮寺を高通寺と云

観音の梵字石あり大サ弐尺八寸

巌湧寺　加賀田村の南なり　嶋山紀州九市峠の西界なり

嶋巌峠立てしく其形湧出るが如し

本尊十一面観音　弘法大師　石浮圖　二基　鐫曰弘治三年

佗　建之

飛泉　二流あり一を不動尊といふ一を子を瀧といふ山面削るが如し

巌罅飛瀉しく幽邃の傍地之

潮瀧　日の聖村の東ニあり長弐十丈餘岩罅より潮生ハ

山川多聚なしく風景愛するの地之

観音寺　日聖村ニありいなしへ諸堂巍々なり

兵燹の後僅ニ一堂存ハ

本尊大日如来　本像長八尺　正観音　立像長弐尺八寸

當寺ハ行基大士の開基なしく天聖山同世の建営之とぞ什寶ニ大般

若經六百巻あり元弘建武の後南小朝騒擾の時故味方とも長陣ニ

てさしかゝ書写をと見へたり一巻毎ニ兵士の姓名を記ハ又傍侶の

書寫も多し正徳三年本田豫州忠続侯全部として武運長久

のため其費用を

喜捨ハ

扇山　澎湃村の東ニあり扇をひらきたる形に似たるゆへ名にもしぶ

掃摩塵ニ也ハ此あり　羽扇の詩ニ　湯ニ除ス三伏ノ炎炎暑更ニ爲ニ蒼生ノ

の事なるべし

香之滝

三日市

烏帽子形八幡宮
河一ノ十日

河合寺
ごま堂
本堂
鐘楼
観心寺
二月市

楠公遺愛碑
服元喬撰
烏石山人筆
いしふみの
苔ハ古ひに
かんこより
洛亀房
彰泉寺

藏王嶺 淡畑村より紀州に至る國界へ嶮岨にして
麓より凡三百歩なり

光瀧寺 天台宗 淡畑村にあり 福王山と号す

本尊不動明王 長三尺 行法上人の作 脇士 左ハ千手観音 右ハ役行者

多宝塔 五智如来を安す

光瀧 本堂の東にあり 高五丈 一名光明瀧 飛流玉龍を舞し 白虹洞にかゝる 山鬼を驚かすと疑ふ 又山奥に瓔珞瀧 紐の瀑布 觀膽の瀧 清浄の瀧 馬頭瀧の中にかくれて 尚も奥に至れバ四十八瀧あり ともに名蹟なる 鉢の松 稲塚 威徳窟 薬師窟 釋迦尾 大黒石 亀石 風吹穴 天狗屋敷 閼伽井等あり 摂尚山ハ欽明帝の御願にして 開基ハ行満上人 此人當山 光瀧寺に一七ヶ日練行したる時 忽然として不動尊現れ 岩上に立給ふ 那智 一宇をむすびて化現をうつし 自刻て本尊とし 其後役小角 御年三十六才の時こゝに苦行して 名産ハ白炭と製して 村中よりこれを出す 獨鈷を携へ 花木鳥獣の形を造り 炭竈に入て焼く 焼これを淡畑炭といふて 不動尊の炭翁に現して 此業を教へ給ふとぞ 土人今に炭焼不動とよぶ

烏帽子形古城 上田北村の上方にあり 碓井大和守こゝに據る 山の形烏帽子に似たり

上田八幡宮 上田村上方にあり 烏帽子形八幡ともいふ 傍に高良祠あり 宮寺を徳泰院といふて 釋迦佛 聖観音を安す

上原八幡宮 上原村西の丘山にあり 此所の生土神とす 例祭八月廿日 社傍これに存す

高向王墓 上原八幡の側にあり 世にこれを 仲哀天皇陵といふも謬なり 高向王ハ用明帝の孫 皇極天皇の弟なり

むかしハ此地も今の高向乃庄内之八幡の神祠にありしか 仲哀天皇と称ふれども 陵なしとて 雑人乱入の制札今 宮寺の土藏にあり 仲哀帝陵ハ播州大藏谷にあり 日本紀曰 神功皇后二年冬十二月丁亥朔甲午葬天皇於河内国長野陵 又松下見林の前王廟陵記云 河内国志紀郡恵我長野の西に葬る陵なり 今錦部郡長野庄上原村にあり 小祠立る 志紀郡恵我長野ハ今相知れずといふ 或曰 今上原の陵墓ハ此地相を見るに 全く陵にあらずして 高向王の墓なり 志紀郡恵我長野の陵 今さだかならずと 又いふ 此辺に帝陵多し 藤井寺の南 西浦のあたり 殊に多し 恐らくハ此中にあらん 定名あるか 未だ識らずとぞや

錦織神祠 向田村にあり 此所の生土神とす 土人彌語里宮 天王とよぶ

人麿古跡 錦部郡村 杮本といふ所にあり 河内志曰 按天平十九年有河内国人阿保人麻呂 蓋此人乎云云 杮本人丸といふことあるによりて 此寺乃本尊ハ必意輪観世音なり 弘法大師の作らせ給ふとぞ

秋もさかりなりしかてらふうくそのハ錦織山の妻木之なり

此寺或人云 人丸と写しつくく侍り

天神祠 市村にあり 寺号法幢寺といふ 本尊十一面観音ハ聖徳太子御作也 長さ凡七寸 神木に藤切松といふあり

二十山 一堆の丘山にして 中に村民あり 二十山村といふ 村中に地藏堂あり

太平記云 延文五年閏四月廿九日の暁 桔梗一揆五百餘騎 忍びやかに津々山より

下さくまぐさ志のくめ時もそぬ秀のまれ生ふ龍泉の一ハ本戸にあしよせ同志ふ岡成
ちりと俗ハ細川相模守清氏と赤松彦次郎範実とハ二十山陣をまゝべて居たりたる龍泉
の緑波を受てアヤ人ふ先をかけらまゐるを但城へ切て入ゝんぞる半ハ又一大事ぞそれをこそ真
ハ先鋒といふべかれ馬ハ鞍置け旗さし急げといふ程ハ有れ相模守と彦次郎と鎧
取て肩ふかげかけ道々高紐かたゝて龍泉の西ハ一城戸高櫓の下へ急上たり

横山天神祠 横山村西條川の東涯にあり其側の巖の罅より潮水涌出る朔望ハ満干あり是風土の奇なり

西條川 水源四流あり一ハ和州大澤嶺の西より流て石見村ゆく石見川といふ大井 墟原 観心寺等ハ経て三日市にて
三日市川といふ長野ハ至つて西條川といふ一ハ紀見嶺の北より
流て石佛村にて石佛川といひ新町ハ歴て三日市川に入
一ハ九市峠より出て巖湧山の檪ハめぐり加賀田村ハ経て
石佛川ハ入一ハ蔵王峠より出て渺畑日野高向上原を歴て
長野にて庵川といひ流て西條川
といふ末ハ石川ハ合ハ

金胎寺古城 嬉村の上方にあり建武年中 頼軍にて攻撃ハ枝城十七ヶ所の其一之又寛正年中 畠山義就も亦ハ
屯ハ金胎寺の
古跡あり

寶珠山河合寺 河合寺村山中にあり
真言宗

本尊十一面観世音 長さ尺八寸許脇士金胎両部大日等又不動明王
毘沙門天成安ハ様正成の守本尊なり

鎮守春日神祠 本堂の側にあり河合寺村生土神とハ
例祭七月十八日

河合寺碑 堂前にあり銘ハ南郭先生筆ハ烏石山人なり
寛保三年秋八月建 其銘云

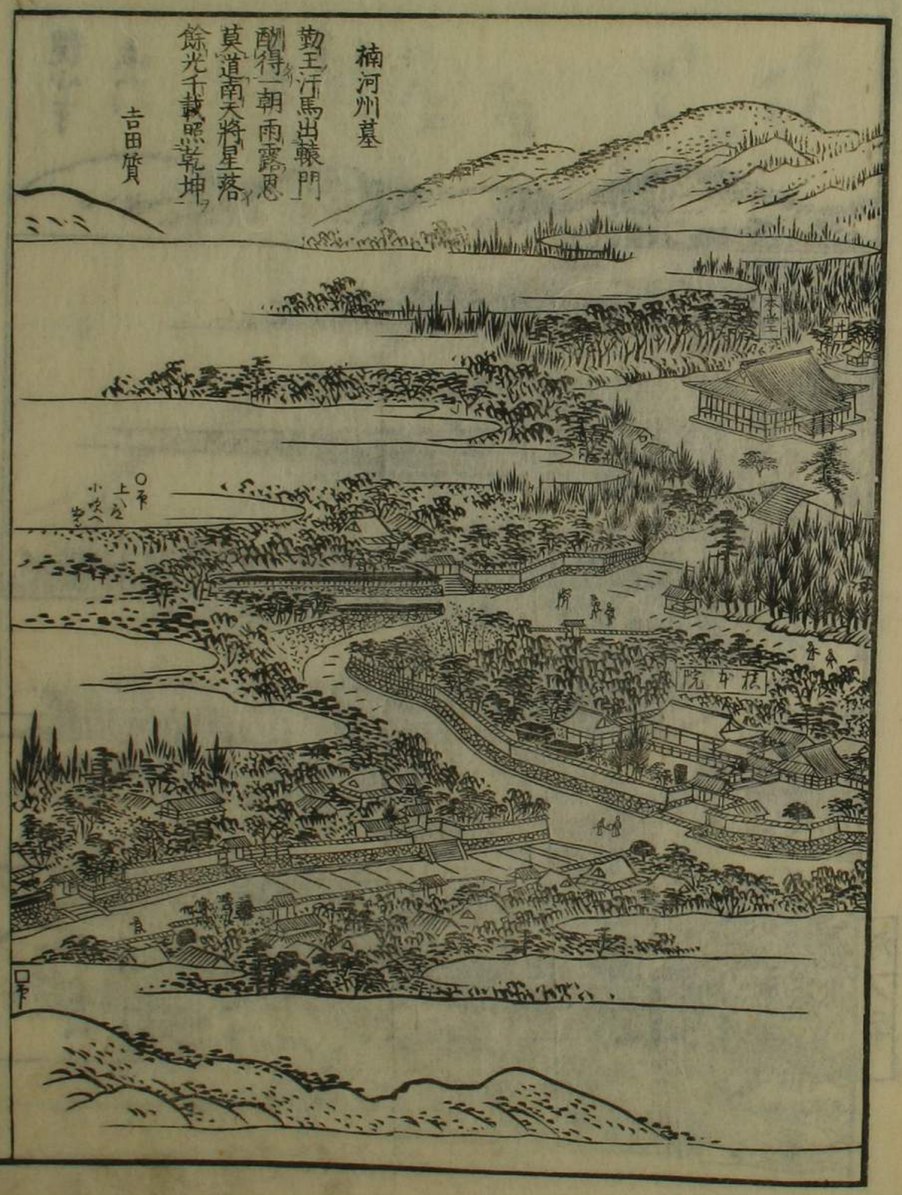
河内挾山晁子君采以邦大夫世采其封南河合邑
邑有河合寺邑名焉記曰古者 皇極帝二年勅建
列朝相繼奉信増脩以至南朝寂為崇觀與州之觀
心金剛兩寺屹為三大刹勅旨數奉禱事勝國之亂
諸閣壊廢大半而其國宣及楠氏所令手書至今藏
鎮焉晁子之立碑於此為寺觀微乎存乎曰否為尚
楠氏也何以尚之為楠氏遺愛也古者楠氏盡忠乎
興國正平時南北戰争數十年矣誠節貫天地知略
盖四海恢復之功雖不成全其子其孫三世志業不
渝實與南朝社稷相終始焉天下後世至于今時莫

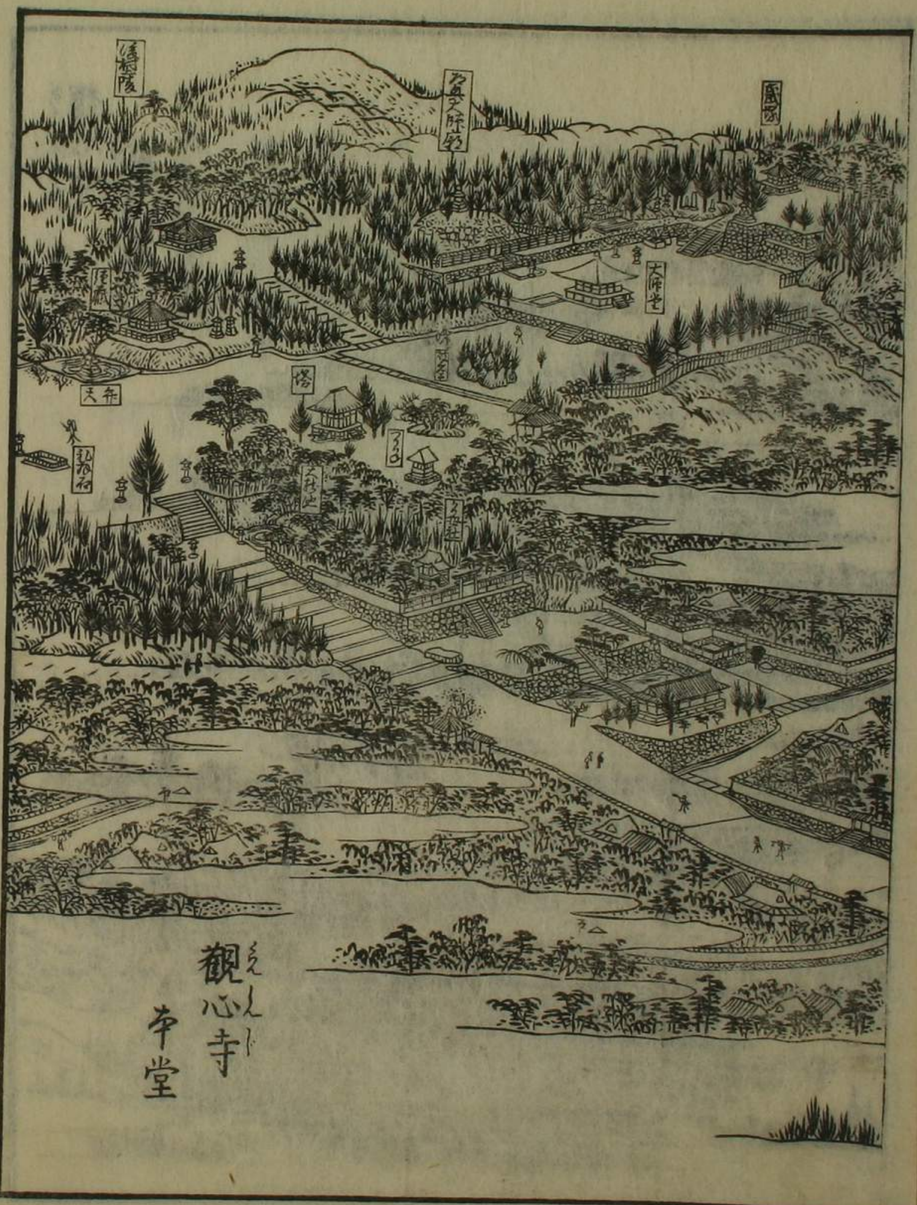
不感激出涕喜言其事焉是為遺愛也為楠氏遺愛
衆矣曷為獨於此河内與泉攝當其時楠氏世守也
前此攝有湊川碑泉則未聞焉爾而河内其所基據
遺愛尤存金剛千早城趾也何以不碑焉晁子曰吾
嘗略行金剛千早一石不存噫盖竟外爾盖河合碑
則晁子遺愛乎我也遺愛乎我者遺愛乎已也因祖
之所逮聞而石乎私土甘棠之遺焉往而不愛以君
子之為亦有樂乎此也楠氏之功德天下後世至于今
時莫不感激出涕喜言其事焉所見同辭所聞同辭
所傳聞同辭是謂口碑備矣不必具列其事則不獨
其遺愛也寺觀雖微乎存後此以楠氏重則楠氏之
亦獨遺愛於此也此立石之志也寛保三年秋八月
服元喬撰烏石書晁泰亮立

楠河州墓

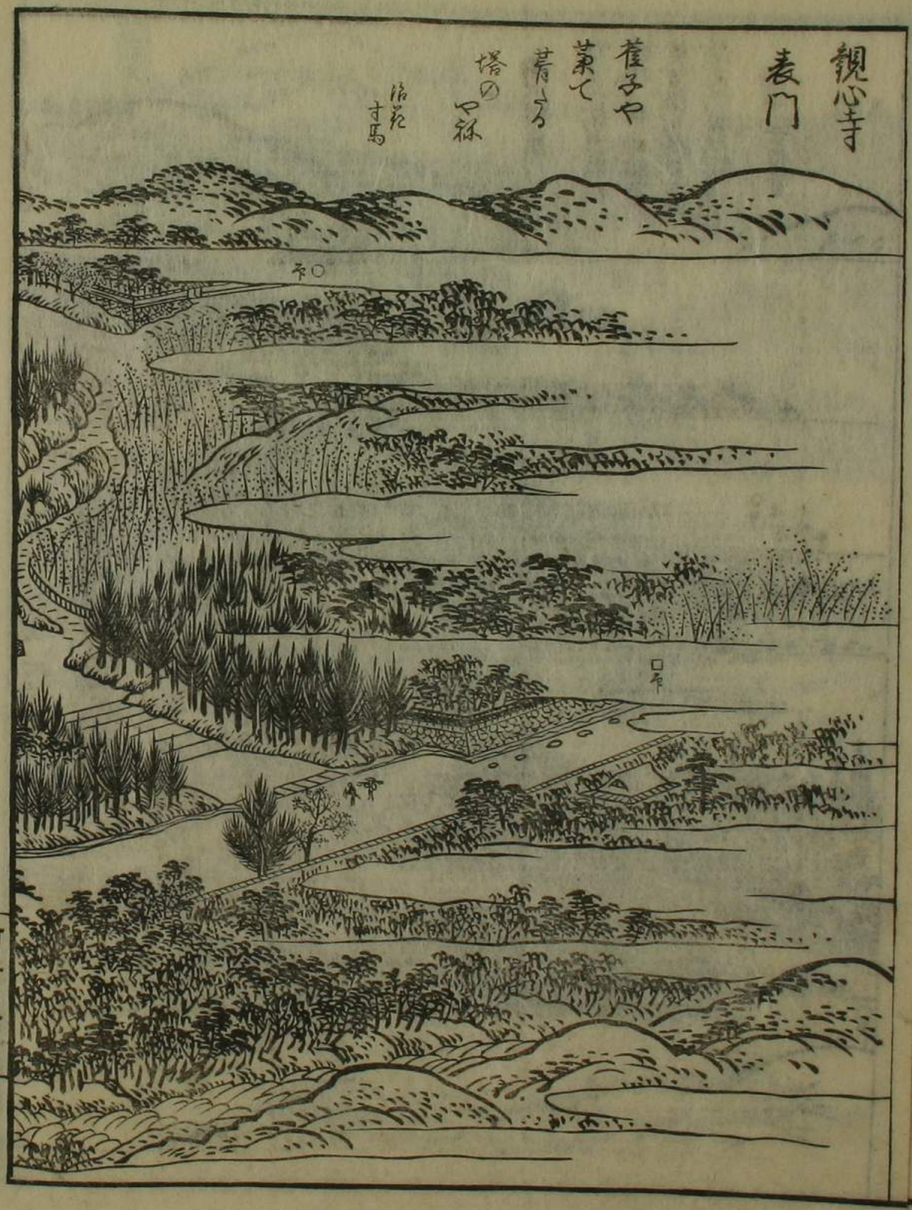
勤王汗馬出轅門
酬得一朝雨露恩
莫道南天將星落
餘光千載照乾坤

吉田賁





観心寺
本堂



観心寺
表門
雀子や
菓て
着する
塔の
や祢
洛花
寸馬

古寺や
秋悲しまふ
佛達
洛
蝶羹
八隅

檜尾山觀心寺 觀心寺村にあり 真言宗

本尊七星如意輪觀世音 弘法大師作長壹尺八寸許脇士不動等 愛染明王僕は同作

二層塔 大日 阿閦 宝生 弥陀 釋迦の五佛成安は初は楠正成の建立し鎌倉勢高越後当師泰が石川河原に陣を取て楠を攻て圍し時軍勢共塔の九輪に下して鑵子を鑄させ佛像は步碎て薪とせし事は平記に見へたりそれより今は旅く仮塔の葉葺屋根へ

賀利帝母社 神像毘首羯摩天の作弘法大師 亀士より將來し

行者堂 惣門の内にあり役行者自作長二尺八寸 弁財天祠 金堂の東池中にあり

閼伽井 金堂の小にあり清冷甘美 七星陰陽所 惣門七ヶ所にあり

礼拜石 金堂の前にあり弘法大師七星陰陽を拜礼しゆへ石へ 狗鉢玉井 賀利帝母社の側にあり

糸櫻 狗鉢玉井の側にあり寿代の大樹にして蚕糸長し

實惠上人廟 金堂の東上に方にあり諸道興大師俗姓は佐伯氏攢州の人へ空海に隨ひ支部密法を稟て天長四年觀心寺を建營は後山を檜尾といふ故に檜尾僧都とも號は承和十四年十一月十三日寂は年六十三元亨釋書に見へたり

河一ノ二十一

楠正成首塚 定惠廟の東にあり延元元年五月廿八日播州湊川に於て戰死は賊酋其忠義に賞じて首は楠家に送は因茲にして葬る土俗首塚と呼ぶ正成は其先大納言好古卿より出て生質忠誠にして才文武を兼て孫呉の兵法に熟し諸葛孔明に比は本朝武侯と賞ぼ元弘元年八月千早の山城を根城として上赤坂下赤阪大根田龍泉及び十七ヶ所の出城を搆へみな正成帷幕の計策にして元弘の天皇隱岐國へ將しゆへ時固く守りて東軍に陣らば天下恢復して後播州の泉判官を拜に尊氏謀反して京城を攻ぬ天皇危難して比叡山に避る正成及び諸將力を盡して討ッ足利大に敗軍して西海に逃る車駕京に還幸ある足利再び九州より黨與を率て京に入んとは天皇新田義貞に命じてこれを禦しむ王の帥利あらば因是正成に命じてこれを援しむ正成曰天皇を再び比叡山に幸かさしめ賊酋尊氏を都に入て新田楠の支軍引包て攻ることのならば官軍の勝利疑なしと上策を献ずたれども諸人皆の如く覆て天皇其言を用ひ給ば遂に播州湊川に到て血戰して一族俱に討死は帝甚夜衰慟して詔を下して從之位中將に贈ら御車は水戸黄門光圀卿の建さかゆへ明舜水が碑銘に見へたり雖彼名所圖會に出次屈原が離騷經に曰諸人高く張て賢士の名かし吁嗟嘿嘿なりと書しもしもしもや比せん

畠山尾張守墓 御新堂の東にあり

後村上院陵 南方紀傳云 樹家の奥武町許みあり 陵墓荒蕪しく 叢林四方より繁しり 陵上み椿樹あり

南朝正平廿四年 北朝應安二年に當る 三月十一日南帝 後村上院 崩を告聖

如意輪寺に葬る 後村上院と謹奉る同年冬十月足利官領

細川頼之南朝を奏聞申様は古の如く持明院殿と大覺寺殿

と一代かわりに御治世ありて三種の神器を北朝へ御渡し

御しく南小御和睦遊ばし南帝御上洛あらば公家武家の

本領本の如く其に官加階相違ある事なれど再三奏聞をと

いへども南朝の公卿武家等これを用ゐして和睦調事なし

此時南朝の領地は河内大和和泉紀伊伊賀伊勢志摩飛騨

信濃上野越中越後伊豫備前石見長門肥後日向大隅

薩摩小國に征東將軍宗良親王九州に征西將軍良懐親王

勢州に北畠の國司おはしまはん

同記云 南朝天授二年三月十一日南方 後村上院の御七回忌告聖如意

輪寺に於て大法會あり導師は日聖大僧正頼意其時宗良親王

和哥を詠て頼意へ送りぬ

幾年かちりて見ゆらんかしいはも昔のつれなかりに 宗良親王

志てしも見し世の春はうつりきそあらぬ花をあふる面影 頼意僧正

御追善

四ツのとれ九のかつりに之みなりきのふは愛とおやろかぬまた 南帝御製

太平記云 南方の皇居は金剛山の奥觀心寺と云源山なれば左右なく歌の

近く面を所ならね共行候の御警固は憑思召れたる龍泉赤坂も

落され又昨日一昨日まで御方せし兵たも今日は多く御歌と成ぬ

と聞へしかば山人松人案内者にしていづくの山は奥までも歌責

入ぬと申沙汰しければ 主上をはじめまいらせて女院皇后月卿雲客

おはいかでを面をと懼恐れさせぬ事限なし

觀心寺官符曰

寺壹院 在河内國錦部郡石川郡両郡南山中

合山地千五百町　地名仁深野
錦部郡以山中一千町
四至　東ハ限横峯　西ハ限紀伊道川登公田　南ハ限小月見谷　北ハ限龍泉寺地並石川郡界
石川郡以南山中五百町　地名東坂野
四至　東ハ限國見峯　西ハ限峯　南ハ限上瀧　北ハ限石川家井堰
兼和三年閏三月十三日　官符

寺記曰
右當寺者先師弘法和尚經行之伽藍北斗七星
降臨之霊山也峯聳八葉自表善藏蓮刹谷紆
四方更摸月圀違沈阻都下腥壇之埵地獨為
寂中神異之山嶽僅入厥埵三密觀念易成覺
任斯地一印頓證云朗陟雲心寺號觀心寺良
有所以哉勝地絶妙蓋以如斯然則弘仁天長
　聖主貴吾寺神秀定御願道場臻承和明時
始被下山地　勅施之官符以為當寺之永格
寔是　皇道潜衛之伽藍上乗秘密之精舍也
後世末資等冝兼知此旨抽朝家安全之精祈
專佛法紹隆之計略者仍勸録緣起如件
一本尊事　先師和尚大阿闍梨耶勵一刻三
禮之美功盡勇猛懇丹之至精所造作之尊容

也抑斯伽藍者當京師之南崎王畿之內於此
地安置持寶金剛之霊像奉祈金輪聖主寶祚
之者也
一於金堂前有一石座是先師坐日之時拜堂
禮佛之所座や和尚滅後之今定為日々影向
之禮石者名
一鎮守河梨帝母來抑當社神體者毘首羯摩
之彫刻圭龍相傳之形像也先師和尚大同元
年帰朝之日奉納三衣箱底被安置當寺者や
式訪傳來鎮守之因由和尚艤帰朝船凌笫里
浪之時乳水涌海上耳露溢湖中疑奇異思尋
彼源流到此勝地金堂東北之阿伽井是彼盪
觴や山谷為體巖洞有採卓牢諸洲霊所之故
卜斯地安今尊為除災與樂之鎮得為護國利
人之福田而已
一於社頭東南有一阿伽井是號獨古玉井和
尚穿鑿之玉井秘密加持之霊水也一度汲之
輩速洗三妄垢穢須叓持之類必潔六情之染
濁淺智愚少之族不可疑甚深功佛化奇特不
可不信矣
一座僧事毘首振斧楠檀咄芎三國稟兼八祖
傳來也仍為佛法護持僧宝不断所安置當伽
藍也
一法性塔事秘密真言道肝數代祖兼霊寶や
深密子細不能染紙矣
一和尚以真金自治鑄七體尊容報酬四恩廣

德無二惣志巧妙造作也密納寶庫不可出外戸矣
右勘録大概如件
兼和四年三月三日
太上天皇奎璽有之
真雅
實慧
○此寺記ハ弘法大師の上足真雅實慧両上人の勘録にして後小松院の宸翰なり則御書判あり

此一巻銘並奥書等以被染 太上皇宸翰也
還書倚後代亀鏡詔而撰明時風編者乎
應永癸巳沽洗中幹
関白經嗣 判

御綸旨
禁裏御本尊愛染王像就被安置當寺内陣
永代勅願長日行法事綸旨如此鎮令
修五種相應淨業宜奉祈四海清平
聖化之由依東寺長者法務僧正御房
執達如件
正平十五年正月十八日
法印俊尊
観心寺衆徒御中

御綸旨
觀心寺内陣常燈爲永代不朽勅願所被始置
也以紀伊國平税当済急之段沙汰之由被仰
國司人早可令下知寺家給者依
天氣言上如件 附長頓首謹言
正平十五年四月八日 修理亮菅時長
進上 東寺長者僧正御房

楠正成書
此旨行承之事与承挑爲御祈禱觀心寺太師
御作不動之尊像之由承候間下向候当山中
寺僧衆方白拵候廿八日御京着候之様可申
奉渡候之御共御上候人と以事前
恐々謹言
十月廿六日
正成 判
瀧覚御房

正行書
頓作御造営無爲御遷宮之目出度存入候
必々参詣候恐々謹言
十二月一日
正行 判
觀心寺衆徒御中

観心寺 正儀書 住侶等申常寺座主鐵牽申狀 副奥書 謹進上之子細載狀条〻忽恠候 正儀 三月二日

左衛門尉正儀 判

進上 御奉行所

正時書 河内國毛田庄内岩瀬壹町観心寺北頭得分住侶先例可被致管領之由仍執達如件 正平五年四月十二日

正時 判

観心寺 仏像三体 以外南朝國宣及楠氏・畠山等書籍宝庫ニ満ち繁ふ候 其一二を挙げ而已

坊中 楠本院什器品

茶壺 二銘 待宵 十六袋 豊臣太閤所持

太刀 二腰 銘一ハ行平一ハ正宗 楠ノ所持

牧溪 観音 南朝王子ノ像 舜恭 芥子 賛 趙子昂 杜律詩意 畿唐圖 君舟 観音 像

呂糟 孔雀 牡丹 君村 朱買臣 秋月 三笑

坊中 中院什器 以坊舎ハ楠氏一族の宿坊なり 昔も龍覚坊と云

青貝菓盤 緋繊腰巻 観心寺両門再興ハ江州志賀郡膳所城主本多俊次度之ハ表名鎗 名剣 勝両門の梁ハ釘ニ

○世ふ南右論とハ書あり正法寺文叔と云者の作 楠正成之石碑を忠臣ハ非ずと駁ト云ふ論ずべし 論ずるに及ばざれバ也

八幡宮 観心寺 境地ハ寺ノ乾ノ方ニ在り 生土祢ノ例ニ依テ九月九日

楠原 観心寺の鬼ぶりを献ずるハ昔ハ前ノ向ノ楠を献ぜしと云

二岳神祠 石見川村ニあり 又社の東ニ修禊場あり 一名川社と云

高向玄理 錦郡郷の人ノ 舒明天皇十二年庚申朝ニ隋ニ遣ハさる 推古天皇十六年隋ニ在ル事 博識宏才ニして 大化元年ニ 押使大錦上ニ授く 唐ニ入ク 天智天皇ノ朝ニ東宮監門郭文挙と共ニ 本邦ノ地理及び唐人ノ具顛末を 国初神祇官ニ奉ル 後ニ 新羅國ニ遣ハさる 同二年九月 新羅ニ在ル事 博識宏才ニして 大化元年ニ 押使大錦上ニ授く 唐ニ入ク 天智天皇ノ朝ニ東宮監門郭文挙と共ニ 本邦ノ地理及び唐人ノ具顛末を 国初神祇官ニ奉ル 後ニ 新羅國ニ遣ハさる 同二年九月 新羅ニ在ル事 博識宏才ニして 大化元年ニ 押使大錦上ニ授く 唐ニ入ク 天智天皇ノ朝ニ東宮監門郭文挙と共ニ 本邦ノ地理及び唐人ノ具顛末を 国初神祇官ニ奉ル 後ニ 新羅國ニ遣ハさる

高向麻呂 旧郡の人ノ 雄渡の朝廷刑部尚書大弁上國忍の子ノ 大寶二年従四位上政事を参議ス 慶雲元年

中納言ハ任ハ和銅元年從三位ハ叙し
攝津大夫ハ任ハ同八月薨ぞ
僧善議 錦織の人之戒體嚴淨にして論ハ道慈我
師にして博識洽聞其ハの智德之

河内名所圖會卷之一 終

河一ノ二十六尾